
展望台

朝霧幸太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

展望台

【Nコード】

N9893Q

【作者名】

朝霧幸太

【あらすじ】

僕は同僚の朱美に誘われてバーに足を踏み入れた。

そこには「ふおっほほほ」と笑う奇妙な老人が居て……

夕空

ふと窓に眼を遣った時だ。

ブラインドの隙間からオレンジ色の空が見えた。

僕は仕事の手を止めて立ち上がり、窓辺に歩み寄った。

西の空が茜色に染まり、輝いている。

手前に浮かぶ雲は灰色のグラデーションを為して連なり、ゆっくりと流れている。

人の手では決して造り出せぬ幻想的な光景に、僕は息を呑み、しばし見とれた。

画家ならば、これを一幅の絵に留めて残したいと筆を執るだろう。

写真家ならば、迷わずシャッターを切る筈だ。

「あれはっ？」

夕空に影絵が浮かび上がった。

由香里だ！

雲が、二年前に亡くした妻の面影を描き出したのだ。

由香里……

時よ止まれ！

もう少し、あと少しだけ、この夕空を眺めていたい。

そうだ！ 屋上だ！

僕は部屋を飛び出しエレベーターを待つ時間を惜しんで階段へ向かった。

「あ……葉山さん。ちょっと訊きたいことがあるの」

部長秘書の桐原朱美が通路で呼び止めたが、僕はそれを振り切つて階段へ駆け出していた。

「すまない！　すぐに戻るから」

僕は階段を使い3階から屋上へ一気に駆け上がった。

由香里……待っててくれっ！

ドアを押し開けて屋上へ飛び出した。

だが、無情にも、その光景は刻一刻と姿を変え、由香里の影絵は見えなくなっていた。

街の彼方へ陽が沈んだのだ。

はあはあと肩を揺らしながら息を継ぎ、既に暗くなった夕空を、僕は茫然と眺めた。

バカ^{バカ}げている。

由香里は死んだのだ。

2年前に39歳の若さで呆気なく逝ってしまった。がんだった。

もう、由香里は、この世の何処にも存在しないのだ。

由香里……

迷い

桐原朱美は同期入社の子社員だった。

「ねえ、さっきは何だったの？」

彼女は休憩室のソファで足を組み替えながら訊いて来た。

残業を厭わず、仕事に打ち込んだ甲斐あって、彼女は管理部の部長補佐に昇進していた。

副部長の役職者は別に居るので、彼女の立場は実質的には部長の秘書と言えた。会議に同席する事はあっても、外部との交渉に於ける裁量権はない。

「うん。ちょっと屋上に忘れ物したもんだからね」

他に上手い理由を思い付かなかった。

「何を？」

彼女はカップコーヒーを啜りながら僕を視た。

「それが……上着を置き忘れたと思ったんだけど、思い違いだった」

「ふーん。あなたらしくもないわね」

彼女は、バッグからタバコを取り出した。

20年前、朱美と共に資材部へ配属になった。

バブル崩壊と言われ、高度成長期を過ぎたと言われながらも、空港建設に関わる資材調達の仕事は例外だった。

折しもISO認証を取得すべく会社が動き出した時だ。

課長に呼ばれ、ISO適合マニュアル策定のメンバーとして参画するように指示された。

僕も彼女も共に文書作成の能力とパソコンを操る腕を買われての起用だった。当時はパソコンでワープロソフトを使える者が少数だったからだ。

技術者の書いた原稿を校正し、ワープロで清書・作成する作業だが、文脈を把握し、整えるには仕事の流れと現場の実態を知らねばならぬ。

本社マニュアルと工場間マニュアルの整合性を図ることが急務となり、二人して各工場のマニュアル作成の担当者や各部署の部署長を訪ねて歩いた。

その間、定形業務を外して貰ったとは言え、外部取引先との交渉には同席を指示された。新人で定形の業務にさえ不慣れな上に更に新たな仕事が課せられて、生活は仕事に忙殺された。

そんな中、彼女とは時に残業を早めに切り上げて、居酒屋で愚痴を吐き出し、将来の夢を語り合う事もあった。

文書を作成しては、摺り合わせの会議が開かれ、矛盾を摘出し、手直しを繰り返し返して、半年がかりで外部審査に堪える品質マニュアルが漸く完成した。

桐原朱美は言わば戦友だった。

やがて彼女は営業部へ異動になり、僕は転勤で神奈川へ赴任した。

僕は赴任先で図書館の職員であった由香里と出会い、結婚し、その二年後に娘をもうけた。

朱美は、その後、営業部に長く籍を置いていたが、昨年の夏、管理部へ異動して部長補佐の席に就いたのだ。

「それで……？　僕に訊きたい事とは？」

「ええ。さつき耳にしたのだけど……MBOへ動き出したって話は本当なの？」

「ああ、経営陣による自社株買収だろ。このまま上場を続ければ外国企業に乗っ取られるのは時間の問題だからね。いや、そうはならないかも知れないが、K社の前例があるから」

「やっぱり本当なのね。でも上場を廃止したら資金調達が難しくなるわ」

朱美は細身のタバコをくゆらせている。

「国内需要がしぼんでるんだから新規の設備投資はやらないんだろ。現に工場を二つ操業停止にしたしね」

僕もタバコに火をつけた。

「まだ、帰らないの？」

「うん、もう少しで切りがつくから、仕上げちまうよ」

「じゃあ、それが終わったら、飲みに行きましようか？ ちょっと面白いバーを見つけたのよ」

「バー？」

「ええ。もう、ずいぶんな、お年のマスターなんだけど……いい味、出してるの」

朱美の、にっこり顔を見るのは久しぶりだった。

媚びを売らない彼女にしては珍しいことだ。

赤い口紅が妖しく誘っているようにも見えるが、気のせいだろうか？

いや、資材部で共に苦労した戦友にだけ見せる隙なのだろう。

僕は、それを断らなかった。

先客

ギイツと鳴るドアを押して店へ入ると、右へ伸びるLの字の形をしたカウンターの端に、先客が一人いた。

白髪のマスターがカウンター越しに、客と将棋を差していたようだ。

「いらっしやい」

マスターが振り向き、にこやかに会釈した。

格子柄のベストと赤い蝶ネクタイが、いかにもバーのマスターらしく似合っている。

「おや、お連れ様でしたか。ようこそ」

「こんばんは」

僕は短く挨拶して朱美の右側に座った。

「むおっほほっ」

先客は僕等を見て甲高い声で笑った。

何だろうか？

「うむっ！ 儂は待っていたのじゃ。ひゃっははは……むほほほっ」

細く長い白髪をだらりと下げた老人は、気味の悪い声で笑い続けた。顔がシミだらけで、かなりの高齢者だ。70代後半……いや80歳に近いのではないか？

「どうじゃ、マスター。儂の勝ちじゃな？」

「参りました」

マスターは、大仰に頭を下げている。

「ふおっほほほ。では今宵は、たらふく吞ませて貰おうかのう」

長い白髪の老人は得意げに笑い、目を細めている。

「賭けをしているのよ。次に来る客は男か、女か、カップルかって」

朱美が僕に耳打ちしてコートを脱いだ。

なるほど。そういうことか。店に入るなり笑われて、訝しく感じたが、そうと聞かされ得心がいった。

朱美は脱いだコートを壁際のハンガーに掛け、僕に向き直って両手をかざした。

同じようにせよということらしい。

僕が立ってコートを脱ぐと、彼女はそれを受け取って自分のコートの上に掛けた。

「幾分、暖かくなって来ましたね。何を作りましょうか？」

マスターが灰皿とピーナツを盛った小皿を置きながら訊いて来た。

スロー・テキーラ

「そうね。マスターにお任せするわ」

すかさず朱美が応答していた。

「解りました。では、ゆつくりと楽しんでいただけるようなカクテルを、ご用意しましょう」

そう言って、マスターは、まず細かく砕いた氷を入れたタンブラーを、カウンターに二つ並べた。

次に棚からボトルを取り出し、計量カップで計ってシェーカーに注ぎ始める。

マスターは同様の動作を淀みなく繰り返し三種類の液体をシェーカーに入れてシェイクした。

その動作は間断無く流麗な手さばきで進められた。

シェーカーからタンブラーに液体が注がれる。

最後にスティック状の何かが飾られてカクテルは完成した。

「スロー・テキーラです」

赤い色のカクテルだった。

「これは、ゆっくり飲むテキーラですか？」

僕は訊いてみた。

「いえ、そのslowではなくスロー・ジン（Slow Gin）……リキュールの一種ですが、これは蒸留酒にスモモの仲間であるスローベリーを浸漬することによって作られます。果実名のSloweに由来するテキーラなので、スロー・テキーラと呼ばれるのです」

「うーん、これは初めて飲むけど、美味しいわ」

朱美が先に口をつけて感想を漏らした。

僕がグラスを口にするとマスターは、カクテルのレシピを説明し

てくれた。

「ホワイトテキーラをメインに、スロージンとレモンジュースを、その半分づつ配合するのです。セロリのスティックをかじりながら飲んでいただくとテキーラのクセのある味をうまく調節できるので」

「なるほど……さっぱりした味わいですね。うまいです」

僕がそう言うと、マスターは、にっこりと笑顔を浮かべて先客の方へ身を翻した。

「本当のことを言つとね」

「んっ？」

「今日は、あたしの誕生日なのよ」

朱美は、そう囁いて、グラスを掲げた。

「えっ？ そうだったのか？ だからか？ そうか……おめでとう」

僕は、朱美のグラスにタンブラーのふちを合わせた。

カチンと小さな音が響く。

「幾つに……僕と同じだから……えっ」

朱美は赤い唇に人差し指を当て、肘で僕を小突いた。

「ありがとう」

朱美は僕を視て口角を上げる。

彼女も僕も共に四十代の半ばにさしかかったのだ。恐らく女性としては素直に喜べない誕生日だろう。

だが、僕の眼には若い頃の彼女よりも成熟した今の朱美に、より
蠱惑的な魅力を感じる。

なぜだろうか？

「今日は奢ってね」

彼女は、そう囁いて僕を視た。黒目勝ちの優しい眼だった。

「うん。もちろんだ」

朱美から、奢ってと言われて悪い気がなかった。

若い時の彼女なら、こんな言い方はしない。いや、彼女の性格から推して、恐らく今でも誰かに安易に甘えたりはしないだろう。

朱美と僕は互いに気を許せる同僚であり、異性でも気兼ねなく話せる稀少な相手なのだ。

「迷ってるの」

朱美が切り出した。

「んっ？」

「取引先の総務部長……柳原さんて言うんだけど、誘われたのよ。あたしが独身だと知って」

「えっ？」

「宴会の席でウチの部長が……高梨さんがトイレに立った隙に」

「ふーむ」

「離婚したらしいの。あたしも離婚歴があるし、与し易い（くみしやすい）とみたんじゃないかしら」

朱美は、そう言ってグラスを空けた。

「だけど立場が、どうかじゃなくて、問題は君の気持ちだろ？」

「悪い人じゃないのよ。正面から切り出したのだから紳士的だと思うわ。あそこまで登って来たのだから能力も高いのよ。結婚すれば、きっと安定した生活は出来るのよ。でもね……」

彼女のグラスが空になったのに気づいて僕が注文しようと思った時だった。

「青い珊瑚礁です」

朱美の前にカクテルが置かれた。

青く澄んだ液体の中にチェリーが沈んでいる。

「あらっ！　きれいっ！　ありがとう」

マスターは常に客への目配りを欠かさないようだ。

朱美は、青いカクテルに口をつけた。

彼女は、三十代の半ばで離婚して以来、独り身で生きて来たと語った。それに後悔はないと。

ただ……今の立場で重宝がられた時代は既に過ぎたように感じる

と漏らした。管理部長は若い秘書に取り替えたいのではないかと疑心暗鬼にかられる事があると言う。

将来を考えれば、四十代の独身女性が安定した生活の基盤を欲するのは自然なことだ。

年齢と共に外見や身体の衰えは避けようがない。

秘書は、そこそこに若い方が交渉事には体裁がいいと言うのも事実だろう。

「でも、本当の、あたしの迷いは、あなたの事なのよ」

「僕の？」

パンの耳

「ええ。今回の人事で、あなたを呼んだのは高梨部長よ。部長は資材部時代は課長だったでしょ？」

「うん」

「あたし達をマニュアル作りに抜擢してくれたのも高梨さん。今回、あなたを本社に呼び戻して資材部の課長に据えたのも、実は高梨さん」

「そうなのか？」

「そうよ。判らなかった？」

「うん。そんなに深くは考えなかった。僕ぐらいの年齢の人材が欲しかったんだろうとしか」

僕はスロー・テキーラを飲み干した。

「それだけの理由だったら候補は本社内に、ごろごろ居るわよ」

「なるほど……それは、そうだ」

「むおっほほほ……お安くないのお。いや、結構、結構」

先客の老人が、わざとらしく耳に手を当てて、笑い声を立てた。

こちらの話を聞いていたのだ。

「王先生っ！」

マスターが制止すると、老人はマスターに向かって言った。

「王様の耳は？」

どこまでも、訳の解らない老人だった。

「マスター、王様の耳は？」

「ぞうさんの耳です」

マスターが、そう返すと、

「違うっ！　王様の耳は？」

老人は再び訊いた。

言葉遊びを始めたようだ。

「赤ちゃんの、お耳」

マスターも負けてはいない。

「違うっ！　もう一度。王様の耳は？」

マスターは、一呼吸置いて告げた。

「パンの耳です」

これには堪らず、朱美と僕は吹き出した。

「うぷぷっ」

「あはははは」

「すみません。お話の邪魔をしてしまいました。王先生は、地獄耳だと言わせたいのです。つまり性能の良い耳なので、あなた達の話が聞こえてしまったのだと」

マスターが解説し、僕等は納得した。

「しかし聞かれて差し障りのある話題は、今日は控えられたほうが」

マスターが小声で告げた。

「そうね。わかりました。良介さん、あたし、お腹がすいちゃった」

彼女は続きを歩きながら話したいのだと気づいた。

「マスター、会計して下さい」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9893q/>

展望台

2011年10月8日13時08分発行